

山と博物館

第40巻 第7号 1995年7月25日

大町山岳博物館

特集 小林 政紘 山の花展 7/23 ~ 8/20



山の花展開催にあたって

小林 政紘

山の花への愛着は別に記しますが、自分で切り開いたものでなく、皆様から与えられたもののように思っており、運命的な感じがします。炎天下に汗水流して、三、四時間もかけて山稜に攀じ登り、その上写真に何時間も費やさせる源は花の霊力によるものでしょうか。私が今迄巡り合った花にまつわる詩で心を動かされた作品に二つあります。その一つは、京都南禅寺前管長 紫山全慶師の左記の詩です。

「椿」

花は黙って咲き黙って散ってゆく

そして再び枝に帰らない

けれどもそのひととき ひとところに

この世のすべてを託している

一輪の花のこえであり

一枚の花の真である

永遠に亡びぬ生命のよろこびが

悔いなくそこに輝いている。

椿をこよなく愛した師の心がわかるような気持になります。椿に限らず、すべての花に例えて良いように思えます。

その二つ目に、詩人尾崎喜八は御承知の通り富士見高原に縁が深く、その実子夫人が次のような詩を謳っています。この詩は三連から成っていて長文の為省略しますが、私はこの三連目の詩に動かされたものです。

「古い道を通りながら」

生命の終わるその時迄も

唯一人生きのこされても

この花のやうに

美しく 強く

この世でわづかにくづしのこされた

太陽のある、樹陰のある、朝露のある

美しい生のあるところで

心の花を咲かす事を祈った。

初夏の或る朝

ホウオウシヤジン

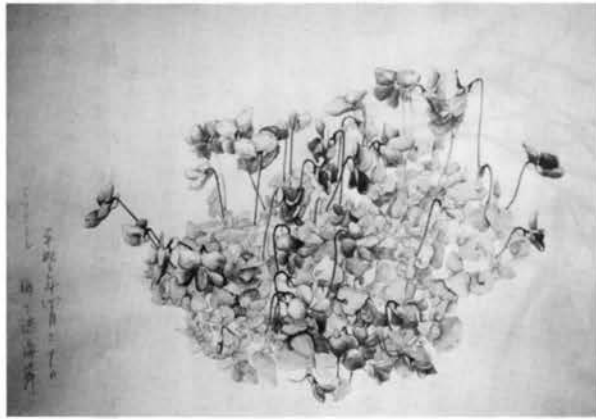
初夏の或る朝

現在実子夫人は、八十九才でかくしゃくとしていられる。この大正十二年、十八才の彼女に尾崎喜八がプロポーズのきっかけを作った詩と云うが、私も心動かされるものがあり、このどちらの詩にも花の霊力と云うものを感じた次第です。

私の花の旅

小林 政 紘

山の花に取組み始めの頃は、八ヶ岳近辺の花でも描いていけば、こと足りると思っていた。事実、このフォッサマグナの走る南アルプス側と八ヶ岳には生まれた我家は、地理的に見ても便利な場所にあつて、その豊富な花を探し、描くだけでも一生かかっても足りないほどバラエティに富んでいる。前沢秋彦先生に云わせれば「この世界に浸っていると、外国へ行っている暇はない！」と云う。私にすれば、それほど考えもなく、簡単なものだった。特別山の花に愛着があつたわけではなく、この世界、熱狂的な方が多いが、好きと云うほどのものでもなかつた。並の登山者が、アルプス登山中あの天下にチシマギキヨウを手元に発見して、なんと清楚な花が心をなごませてくれるのかと感心する程度であつた。唯その上に、この美しさをなんとか絵にしたいとの強烈な衝動にかられるのである。我が国の置かれている場所柄、夏は酷暑の太平洋高気圧に、冬は厳寒のシベリア低気圧にさらされることも植物にとつて豊富な種を育む源だろう。高山に於ては春の到来が遅く、三ヶ月余りの短い夏の間一気に成長しななければならぬ。このような自然の厳しい制約の中で育つのであるから、よく云うツバやダイコンとはちがう。花に優雅な気品が漂うと感ずるのは私だけではなからう。山の花こそは、始まつたら止まれないほどその魅力の虜になってしまう。どの花も街の花屋さんで売っている花とはちがいが明瞭である。買つてくれといわんばかりに華美でなく、アルプスの風に揺れて清楚でいて可憐で、道端よりもむしろ岩陰にひっそりと咲いている奥ゆかしさ。こんな状況の下に目指す花でも見つ



イソノスミレ

けようものなら、思わず歓声を上げてしまう。こんな経験は私ならずとも、皆さんもあの山で、この沢にと沢山の思い出が沸き上がってくることと思う。私の思い出を出品作の中からいくつか拾い挙げてみた。毎年のことだが、春はまずスミレからはじめる。「イソノスミレ」の写生に新潟の鶴の浜海岸へ行った。スミレの中でも砂地を好み、しかも日本海北陸沿岸から温海温泉あたりまでと限られているのもおもしろいと思つた。日本の砂浜がそうであるように、ここもあとわずかで砂浜地が無くなるようになっている。テトラポットが敷かれ、護岸工事が進んで自然に親しむ余裕はなくなつた。石油試掘の折に出たというすぐ近くの共同浴場に入って四方山話に花を咲かせたが、イソノスミレを知る人は誰もいなかった。同じスミレでも「タデスミレ」は山の中でも森の中に生きるもので、それも一日中照りつけるところは好まぬようである。さらに、日中わずかに日が射し、適度の湿度があり、あまり乾燥地ではないけならしい。これが丈が三十センチにもなる大型のスミレを生むものであろうか。その上、季節は若葉を通りこして、初夏の六月上旬のわずかの期間が見頃となると、よくよくねらいを定めないと終わつてしまうことになる。昭和天皇が信州行幸の折、スミレ博士の浜栗助先生が御進講をつとめた花である。浜先生は病床にあつて長い。早い快癒を祈るばかりである。先生秘蔵の場所へお伴させて頂きたいと願つている。「ホソバナコバイモ」は岡山市で医者をして三好薫先生に御案内頂いた。高梁川の川沿いもようやく芽吹きだした三月初め、まだ春は名のみで寒い。親見市にあとわずかのところで山に入った。私は写真でしか知らないもので、ちょっと見ればわかる白い花ぐらゐに思つてた。どんどんやぶに入つたが、実はそんなところにはない。土手の水はけのよい、しかも適度に水気のあるところが適地で、五センチに満たない小さな花！。人に採られまいとしているかのように、他の雑草と同色である。小さいし、目をこらして探さなければ気がつかない位である。花も葉も細く、ピンとして気品のある姿！。山の花の愛好家が垂涎の花という意味が合点した。しかもこんな人里近くに珍品の花があるとは。愛らしい姿に早速目もくれず写生をはじめた。このホソバナコバイモは一段と姿が良い。これ



ホソバナコバイモ

を写生したからには、いつかコシノコバイモを写生しなければと思つた。桜前線も北上して北海道の山々にミネザクラが咲く六月初め、やっとアボイ岳に入った。登山には土地の観光名所としてみごとに整地され、キャンプ地は公園のように整えられ、山の川なのに護岸も整備されて危なくないようになっている。安全面を考えればこれくらい良いのだから野趣がない。子供は川ではなくプールへでも入る気持ちになりそう。そんなことを思いながら山に入る。まずのつけから驚いたのは、エゾオオサクラソウの群落の歓迎ぶり、蛇紋岩植物の宝庫といわれる著名な山だけに期待どおりの花が続々と見つけられ、なかなか上へ登らない登山者となつた。岩の裏側へ廻り込んで目的のエゾキスミレの群落を見つけた時など、歓声をあげずにはいられなかつた。二日目、少し下つて幌馬屋根に至ると「ソラチコザクラ」の群落！。これだつて足の置き場に困るほどだ。小さなものだけにこそ今年も咲いてくれたと思わず云いたくなるほどだ。「レプンアツモリソウ」を描きに礼文島へ渡つた。その前の年に下見もしてあるので、他の山の花のように探す必要はない。つまり花のあるところは厳重な鍵のかかつた檻の中



エゾオオサクラソウ

ウを描き、岩手県の早池峰へ入った。ウスエキソウの仲間は、五十種くらいあってヒマラヤや中国に多く分布しているようだ。本場ヨーロッパに沢山あるのかと思つたら、たつたの一種しかないという。それでも日本には十種くらいあるようなので、とり合えず自分の足元をかためなければと思つている。北アルプスにたくさんあるミネウスエキソウのようなものと、花の美

で、夜はサーチライトも灯くし、勝手に中に入ることは出来ない。檻の中でも見学コース沿いに柵があり、眺めるだけで勝手に花のそばへ行つて写真を撮ったり、写生することは出来ない。この時もラッキーだった。出かけた時は見学者も少なく、もう最後の花がこの棚のすぐ下に三本咲いて、のぞき込むようによく見ることが出来た。若葉の緑に對比して、ほろの白さ、少々クリーム地に近い白さといおうか、実に美しい。ひと昔前なら島のどこにでも見られたと云う。最近カラフト入りした報道写真を見ると、かなりこの白いアツモリソウがあることがわかる。やはり空気の清澄な証だろうと一人で想像している。

七月に入って「レブンウスエキソウ」を指した。あのサウンド・オブ・ミュージックから「エーデルワイスの歌」をなつかしむ方もいれば、本場のヨーロッパに思いを馳せる人も多いと思う。そのくらい岳人の人々にこの歌も愛唱され、山への思いを新たにされる。さらに花好きの人にはエーデルワイスを一目見たいという思いが強いと思う。そんなことから私もレブンウスエキソウを探した。桃岩からのハイキングコースをとった。中間地点あたりに絶景の地でレブンウスエキソウの群落に出逢った。これも年によってか

なり咲き具合がちがう。学名のレオンポディウムは綿毛の密生した包葉と頭花とをライオンの足首に例えたものだと言われ、なるほどあるはる札文鳥まで来て見る価値は十二分にしばし眺める時間が長くて、描く段になかなか出来ない。

夏寸前という六月末、北海道は雨籠沼へ行つた。その前の年札幌での個展会場で、来場者の多くの方から「雨籠沼へ行つたことがありませんか」という質問を沢山頂いたので、これはどうしても出かねばならぬと思つた。話の様子から関東の尾瀬沼のようであると想像したら案の定、燧岳の代わりに鬘寒別岳があり、風景はよく似ている。唯、ミズバショウとエゾノリユウキンカが同時に咲いていることが違うだけか。私には池塘に立つとミズバショウの白さより、エゾノリユウキンカの鮮やかな黄色が忘れられない。その板敷廻廊の溜り場のようなところに、これこそ描いてくれといわんばかりに、たつた一本だけの「イワイチョウ」が咲いていて即座に描き始めた。よく見れば湿地の中はイワイチョウの葉が一面びっしりとあるのに、まだ気温が昇らないのか花をつけているのはこの一本。

しきも感じられず、よく見かけるのでまだ描いてもいいない。大平山のオオヒラウスエキソウ、鳥海山や月山にあるヒナウスエキソウ、至仏山のホンパヒナウスエキソウ等をかたづけることだ。シーズンには新幹線の新花巻から岳行の直行バスが出ており大変便利になった。岳には宿坊が八軒あり、往時にはかなりの数の宿坊でにぎわつたらしい。その修験山伏により早池峰神楽(重要無形民俗文化財)が今日まで伝わっている。従つて、早くから信仰の山として「南部富士」の名で呼ばれるほど有名であった。どんな盛夏でも三時すぎには雨が降りだすといわれる山の理由が登つてみてよくわかつた。太平洋からの強い風が小田越を越えようと吹き上げてくる。と雲が沸き、従つてその下は雨が降りやすく、逆にお鉢廻り岩あたりから上は天気が良い。

そんな悪天候のことからすれば、北岳は全く快晴の上々の時に登り「キタダケソウ」を始めとしてタカネマンテマまで描いた良い山行だった。この時驚いたのはカメラマンの多さであった。有名山岳写真家の里なのか、写真教室のように三脚がずらりと並べられて、夕日を撮影するのだという。十人や二十人でないのだから、昔日のように夜叉神峰越えのないコースとなり、奥の広河原までバスが入るので楽になったからだろう。

コースが楽になったといえば、白馬の梅池自然園へも昨年からロープウェイが出来て、年長者でも散歩気分が高山植物にお目にかかるようになった。その白馬大池への途中で「ミヤマダイコンソウ」を描いた。神の田圃から上の賽の河原のような岩の連続した急登のいやなコースであったが、岩と岩にはさま

れた場所に点々とこの花があり、そのうちの群にとりつかれてしまった。場所が悪いように、俄かに暗くなつたと思うと、ドシャ降りの雨にやられてまいった。用意はして行つたものの、画材だけは完全防備して、隠れる場所もない山上で途方に暮れた。

十一月も文化の日を過ぎると、あたりが寂しく感じるのは私だけではない。何年か前に私のギャラリーで菊花展を開いたことがあった。天皇の即位記念にちなんで、八ヶ岳近辺に多いノコンギクやユウガキク、シラヤマキクは勿論だが、キク科ではないけれど山の花の中では有名なウサギキクなども展示して楽しかった。そんなことで季節はずれに咲きたす「アシズリノジキク」を描き、四国の足摺岬に出かけた。岬にあることは分かっていたが、まず自生地を探ることが大変であった。こういう時は山の花で培われた勘と経験が役に立ち、むだな時間と労力を使わずに済んだ。植物の特質によつてどのような地形や場所を好むのか、そのようなところはこの地形からしてどの辺にあるのだろうか、と想像できた。

(長野県諏訪郡富士見町在住)



レブンアツモリソウ

井上靖 — 『氷壁』のロマン

堀井 正子



山岳小説といえ、まず新田次郎の数々の本が浮かんでくる。しかし、素人でも山に登りたくなる本という点では、井上靖の『氷壁』（昭和三十二年刊）の方が上ではないだろうか。

もちろん『氷壁』の主人公の魚津や小坂が素人の登山家というわけではない。彼らはプロの登山家として並々ならぬ自負を持ち、互いを無二のパートナーとして山にアタックしつづけている。損得の話でいえば一銭の得にもならぬことに命をかけ、しかも、プロとして決して危険をおかさないと自負する山登りの姿は素人の感覚とはほど遠いものがある。そしてとうとう、冬期の初登攀ルートの前穂東壁のアタック中に小坂が滑落し、魚津はかけがえのないパートナーを失う。ひとり残された魚津は小坂の死を大死にしないために、わずかな滑落であつてなく切れたナイロンザイルの性能を問題にするが、その真の決着をみないうちに、魚津もまた穂高の滝谷カール

に消えていった。

これではどうにも素人には近寄りたいたい山の話に思えてくるが、『氷壁』のある種のイメージは、山を知らぬ読者に山の魅力を知らせるに十分なロマンがある。井上靖の文章はうまいし、上高地や穂高は文章で語られただけでも十分に美しい。しかし、もつとも強く読者をとらえたのは、山で恋人を思うというイメージの新鮮さだったのではなからうか。

小坂は山で恋人を思い続けてきたという。彼の恋人は八代教之助の妻美那子。彼女のふとした心の迷いを小坂はほんとうの愛だと思いつづけて山に登り、山に登ればいつも美那子のことを思い続けてきた。山岳小説の中には、登山家が必死で山に向き合うときに、人間の恋人が入り込む余地などあるわけがない、と描くものもある。しかし、『氷壁』の小坂は山登りが山で思う女こそ、その登山家にとって本当に純粋の愛ではないか、本当に純粋な恋人ではないか、と無二のパートナー魚津に語りかける。美那子は和服の似合う、都会のぜいたくさがみごとに似合う、そんな女性であつたから、どう考えても山に連れて来られるわけがない。それでも小坂は自分が挑むこの美しく厳しい氷壁を美那子に仰がせたいと激しく夢見た。

そして魚津も、小坂の夢を聞いた魚津も美那子を手へ連れて行けたらと思つていたのである。

小坂が雪のついた東壁を美那子に仰がせたいと言つた時、魚津は自分が頭の中で全く別の場所へ八代美那子を立てていたことを思った。樹林地帯である。トウヒ、ブナ、マカンバ、シラビソ、カツラなどの林の中の冷んやりした道。そこには秋の陽がこぼれ、梓川の流れる澄んだ音が絶えず聞こえてくる。そしてそこに上半身を反らせ気味に、すつくり立っている和装の八代美那子。

登山家らしい夢というべきなのか。それとも登山家らしからぬとプロの登山家ならいのであろうか。山の素人には判断できかねるが、小坂と魚津の夢は読者の夢にすべりこんでくる。読者もまた恋人に氷壁を仰がせたいと思ひ、紅葉の樹林地帯に立つてみたいと思う。可能か可能でないか、そんなことは問題にもならず、美しい山岳の中に立つイメージが強烈に心に残る。

『氷壁』が生んだ新しいロマンである。そしてもう一つ、魚津の最後となった山行がある。彼は一つの愛を振り捨て、一つの愛に向き合うために、あえて危険な穂高滝谷ルートを選ぶ。鳥も通わぬ滝谷カール、そう言い習わされた大岩壁が山頂から山麓へはげしくなだれ落ちていく。流水もあり落石も頻々。

だが、魚津は引き返せなかった。美那子を忘れ、かおるに引き合うために、どうしても進まねばならなかった魚津は大落石に命を落とした。

一つの愛を忘れ、一つの愛に向きあう山。恋人を山で恋ひ、恋人を山に立たせたい夢。『氷壁』は多くの山を知らない読者に、山の新しいロマンを夢見させたのである。

友の会だより

(近代文学研究家)

七月で開店一周年を迎えた、山岳博物館友の会経営「喫茶こまくさ」のテラスに、雨と強い日射しをしのぐ為の日除けを設置しました。来館された方々に、大町市や北アルプス連峰の展望だけでなく、ゆつたりとした時間もすごしていただいております。

新しく、手づくりパンセット・ケーキセットの他に、和菓子とお茶もメニューに加わりました。

また、山岳博物館オリジナルの土産品として、新しいロゴマークと、斉藤清さんの山の板絵のデザインが入ったTシャツ・トレーナー・ナップザック・エプロンなどの他、山や動植物に関連した品など地元の方々の手づくり品を中心に、世界の国々の土産品などもそろえ、売店内の品数も増えました。

今年度は、十一月三十日まで営業します。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

山と博物館第40巻第7号

一九九五年七月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL0267-2211
大町 山岳博物館
印刷所 長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号0054007713393